

「南部文学」はどこに向かうのか？:Backward and Forward

Where Is “Southern Literature” Going?: Backward and Forward

早瀬 博範(Hironori Hayase)

Abstract: The aim of this paper is to project the future of Southern Literature by reviewing how Southern Literature was created. Southern Literature bloomed in the 1920s and 30s under the name of Southern Renaissance, and was led by Southern Agrarians opposed to industrialization spreading in the U.S. In the 1940s, they, keeping in step with literary critics of New Criticism, made it rise to the level of American narrative. Modernist, high-brow Southern Literature ~~w~~—was well suited to the government’s demand in the Cold War period. In the process of its development, however, Southern Literature and the image of the South has been intentionally created and restrictively defined by Agrarians and New Criticism. The fact of its’ being Southern became more important than other elements S and, in consequence, “the South” in it is far away from the real South.

Looking at “the real South” in the 21st century, the difference in lifestyle and culture between the North and the South has been diminishing and cultural diversity has been heightened by the rapid increase of Hispanic people in the South. It is time to go back to its beginning and reexamine what Southern Literature features: slavery, feelings of defeat in the Civil War, strong nostalgia for the Old South, and cultural differences between the North and the South—can these traditional themes remain in the future of “Southern Literature”? Based on this backward examination of the progress of Southern Literature, this paper will examine where Southern Literature is going forward.

Keywords: Agrarian, New Criticism, Modernism, Southern Renaissance, New Southern Studies.

はじめに

「南部文学」は、20世紀のアメリカ文学史において一つの大きなジャンルと

してアメリカ文学の発展に質量ともに貢献した。「南部文学」は 1920 年代から 1930 年代に開花した「サザン・ルネッサンス」と呼ばれる文芸復興で始まる。サザン・ルネッサンスを主導したのは、当時アメリカ全土に広がりつつあった産業主義に反対した南部農本主義者たちで、彼らは 40 年代になると、ニュー・クリティシズムと結びつき、モダニズムを支持する。このような南部農本主義者たちにとって、フォークナー文学は、「産業主義の北部」に対抗し、「古き良き南部」をノスタルジックに希求し、しかもモダニズム的な文学手法で描いていることから、彼らの理想型とされた。結果、フォークナーは南部文学のアイコンとして、サザンルネッサンスを牽引し、アメリカ文学のキャノンとしての地位を確立していった。それに併せて、「南部文学」自体も、アメリカ文学の中で重要なジャンルとしてその価値と存在意義を高めていった。

一方で、このような趨勢は「南部文学」というものの概念を規定化し、枠組みを固定化し、さらに批評形態までも固定化させてしまったことも事実である。あまりに強固で巨大な枠組みは排他的になり、その結果、見えなくなってしまったものや、見なくなってしまったものも指摘されている。さらに、時代の流れが、そのような枠組みに揺さぶりをかけている。時代が進み 21 世紀になると、南北の違いもどんどんなくなり、南部文学のお決まりのテーマが完全に過去のものとなりつつある。これまで「南部文学」を「南部文学」たらしめていた要素——奴隷制の問題、南北戦争による敗北感、「古き良き南部」へのノスタルジー、北部との経済的格差、北部資本主義の侵食など——も見直さなければならない時に来ている。このような中であって一体何をもって「南部文学」と言うのか。現在の「南部作家」は一体何をテーマに書くのだろうか。さらに、批評家はどのようなアプローチをかければいいのだろうか。もし「南部文学」が存在し続けるとすれば、これまでのテーマ自体、当然変わらざるをえなくなるだろうが、その場合、それを「南部文学」と呼び続けていいのだろうか。「南部文学」の存在意義が問われている。

以上を踏まえ、本論では、南部文学、さらに南部文学批評は一体どこへ向かっていくのだろうか、という問いに答えるために、南部文学の発展の歴史を再検討し、それを踏まえ、南部という場所の変化を捉えながら、これからの南部文学の展望を考察する。

I. Where is Southern Literature? /What is Southern Literature?

「南部文学」の将来性に対する問いかけは、80年代ごろから徐々に表面化してくる。“The Closure of History in a Postsouthern America”のなかで、Lewis Simpson は“we are beginning to live in a postmodern America.... The epiphany of the southern literary artist will not be repeated. The Southern Renaissance will not come again.”(269)と述べてように、すでに「サザン・ルネッサンス」の限界を感じている。Simpsonはこの時“postsouthern”という語句をつかって、これまで確立されてきた“south”や“southern”という概念の見直しの必要性を指摘している。Daniel Young も“it is difficult to differentiate between the contemporary southern novel and fiction produced in New York, Chicago, or Paris.”(24)と述べ、当時出版されている「南部文学」に分類される小説に、従来の「南部文学」の特徴と言われていたものがすでに薄らいでいることを指摘している。Fred Hobson は *The Southern Writer in the Postmodern World* (1991)のなかで、Bobbie Ann Mason、Anne Tyler、Lee Smith、Clyde Edgerton、そして Ernest Gaines や Alice Walker といった黒人作家、さらに近年の Cormac McCarthy、Harry Crews、Barry Hannah と、具体的に作家名を挙げ、彼らの扱うテーマに関して、彼らはすでに「人種問題や罪意識との戦いに加わる必要性」を感じておらず、それらを「完全に過去のものとして置き去りにしている」(6-7)と明確に述べているⁱ。

このような動きを受ける形で、Michael Kreyling は *Inventing Southern Literature*(1998)において、「これまでの南部文学として確固なものとして築かれていた伝統に異議を唱え、その中で失われたものの回復」(xii)を主張した。Kreyling の呼びかけに呼応するように、2001年には *American Literature* の特集において Houston Baker, Jr.と Dana Nelson は、これまでの白人男性による南部文学だけでなく、より包括的な南部文学および、新たな南部研究(new Southern studies)の構築を提唱したⁱⁱ。同様に、Scott Romine も“Where is Southern Literature?” (2000)という衝撃的なタイトルで、以下のように「南部文学」のアイデンティティに疑問を投げかけた。

In the end, it may be that the question “What is southern literature?” necessarily turns on the question “Where is southern literature?” It is, for example, in the South (conceived as a location, a place, as et of determining conditions) or in the

literature (conceived as a style, as a sense, as a set of representations)? If we answer the former, which conditions are determinative, and which are peripheral? Can Southern literary regionalism be defined in positivist terms, or is it contingent upon a structural relationship with other literatures, other regions? My purpose is not so much to answer these questions systematically as to pose them as a way of clarifying the crisis of place---and of southern literature---in a time of transition. (6)

Romine は、これらの動きを「南部文学の危機」と呼び、南部文学の条件とは何か、地域文学としての独自性を維持できるのかと問いかけた。

サザン・ルネッサンスから始まり、アメリカ文学の中で趨勢を極め重要な位置を占めてきた「南部文学」が、今やそのアイデンティティが問われる事態となっている。

II. 「南部文学」の検証：Backward

第1章で述べたように、1980年代から「南部文学」のアイデンティティが揺らぎだしているが、その要因はどのようなことが考えられるのだろうか。外的な要因と内的な要因とに分けて検証する。前者は、南部文学を外側から揺るがす要因で、後者は、南部文学そのものが内包してきた特質こそが要因となっている。

(1) 外的要因

南部文学に変化をもたらした外的な要因として、以下の4点を挙げることができる。

① 時間の経過による「記憶の断絶」

伝統的な南部文学の主要なテーマは、奴隷制と南北戦争に関連している。しかしながら、南北戦争や奴隷解放令から、すでに150年以上経っている。それらは現代の南部に生きる多くの人々の記憶には存在せず、しかも今では3世代以上離れてしまっているので、その時の経験や影響を語り継ぐことも困難になっている。したがって、それらを現代の南部出身の作家が題材として選ぶことは考えにくいし、また読者がそのようなテーマを受け入れられる土壌も消失しているという現状がある。

② 資本主義の進展による「対抗軸の消失」

20 世紀前半までは南北の経済的文化的格差は歴然としていたが、産業資本主義の進展により、現在では、経済的にも文化的にも、それほど差がなくなっている。北部にある商業施設や商品は、ほとんど南部にもあり、「南部らしさ」「南部の独自性」がなくなっている。つまり、20 世紀中盤まであった「南部人の誇り」「南部の伝統」なども影を潜め、南北の差異は薄らぎ、歴然とした対抗軸がなくなっている。

③ グローバリゼーションによる「多文化現象」

グローバリゼーションの波は南部にも及んでいる。*The Postsouthern Sense of Place* (2005) の著者 Martyn Bone は、“‘The South’ increasingly is integrated into a dazzling network of global or ‘transnational’ flows—not only of capital, but also of immigrants and their cultures”(xii) と述べ、多くの移民が南部に入っていて、同時に新たな文化が加わりつつあると指摘している。実際、テキサス州ではヒスパニック系の移民が 70 年代から増加し始め、1990 年から 2000 年の 10 年間で 70% も増加し、2020 年には、白人とほぼ同数 (32%) にまで達している。また、ノース・キャロライナ州の増え方は劇的で、394% の増加率を示しているⁱⁱⁱ。歴史家 Raymond Mohl は“Black and white once defined the racial landscape of the American South, but multicultural and multiethnic rather than biracial now describe society in many southern places.”(35) と述べ、ヒスパニック系の人口増が南部文化を書き換えようとしていると指摘している。このように、南部はすでに、白人と黒人の二極化した文化圏でなく、ヒスパニック系、さらにアジア系の人々も増えており、多文化的な視点が必要となってきた。

④ 新しい批評理論による「作られた南部」の解体

David McWhirter は、以下のように新しい批評理論の進展が南部に対する見方を変えたと指摘している。

More recently, scholars drawing on new work in cultural and postcolonial theory, social history, and cultural geography have begun to question “southern literature’s” excessively U.S.-centered approach to the history and culture of the Americas, and to challenge its neglect of the cultural, linguistic, class and social differences that

fissure a purportedly unitary “South”(1)

1970 年代以降の新たな批評理論である、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル批評、社会史研究、文化地理学などにおいて、「南部」(the South)という概念が一枚岩ではなく、文化、言語、階級など社会的な差異があることが指摘されている。多角的な視点が導入されることで、これまでの「作られた南部」の固定概念を捨て、「現実の南部」を見る必要性が生じている。

以上のように、1970 年代から現在までの時代の流れと社会の動きが、必然的に「南部」の定義の問い直しを要求している。これまでサザン・ルネッサンス以降の南部文学の趨勢が「南部」という強固な概念を作り上げ、当然のように維持されてきたが、現実の南部自体が大きく変化を見せている現代にあっては、南部の再定義が必要となってきた。

(2)内的要因

南部文学のアイデンティティが問われている内的要因として南部文学が形成された経緯、および発展の経緯が大いに関係している。南部文学そのものが内包している特質に原因がある。本論では、そのような内的要因として以下の 4 点を挙げたい。

① 「後ろ向きの視線」 (backward glance)

故郷南部に目を付け、南部文学というジャンルを生み出し確立させたのは南部農本主義者たちである。彼らの主張はそのマニフェストともいえる *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*(1930)に具体的に述べられている。アメリカ全土に流布しつつある産業主義を理想とした「新南部」に突き進むのではなく、南部の伝統に回帰しようという主張である。産業主義の点で遅れている状況を逆手にとった見解にも聞こえるが、芸術は、自然に対して自由で私欲のない「正しい態度」 (right attitude to nature)で臨むことで生まれるのであり、産業主義下では決して生まれないというのが彼らの主張である。

Nor do the arts have proper life under industrialism, with the general decay of

sensibility which attends it. Art depends, in general, like religion, on a right attitude to nature; and in particular on a free and disinterested observation of nature that occurs only in leisure. Neither the creation nor the understanding of works of art is possible in an industrial age except by some local and unlikely suspension of the industrial drive. (xlvii)

John Ransom もあえて時代の流れに逆らい、旧南部の伝統主義に回帰しようとする「後ろ向きの視線」(backward glance)によって、南部の土地、歴史、伝統的生き方に価値を見出そうとしている。

It is out of fashion in these days to look backward rather than forward. About the only American given to it is some unreconstructed Southerner, who persists in his regard for a certain terrain, a certain history, and a certain inherited way of living.
(1)

Allen Tate が、1945 年に“The New Provincialism”の中で述べているように、この「後ろ向きの視線」から「現在の中に過去を意識する」(conscious of the past in the present)という姿勢が生まれ、それが南部文学の重要な特徴となっていく。

With the war of 1914-1918, the South re-entered the world—but gave a backward glance as it stepped over the border: that backward glance gave us the Southern renaissance, a literature conscious of the past in the present. (272)

しかしながら一方で、このような南部の伝統への保守的な態度は、Charles Wilson が指摘するように、ノスタルジックな色合いを帯び、「南部」を一種、ユートピア的な楽園のような存在としてイメージを固定化させていった。

Agrarians defended agrarianism as the southern tradition. Although their defense of rural life was soon dated, their conservative championing of traditions anticipated a tenacious backward glance at a supposedly better regional past, leading to a nostalgic and fruitless search for pristine authenticity. (8)

②「南部の遺産」という限定された題材

「後ろ向きの視点」は題材も限定させた。従来の南部の伝統に加え、南北戦争での「敗戦」が重要なテーマを与えた。~~Hobson~~が *The Southern Writer in the Postmodern World* の中で、「南部のアイロニー」という言葉での Hobson の説明が的を射ている。

During the years of the Renaissance, it was assumed...that the South was defeated, failed, poor, unprogressive part of the United States. But an irony of southern literary history...is that this legacy of defeat and failure served well the writer in the South.... Just as failure is more interesting than success... and defeat more interesting than victory, the southern writer had a great advantage over his nonsouthern counterpart.... The South *was* dramatic. If racial tension, conflict, violence—as well as unrealistic but lofty aspirations—made for tragedy, they also made for spectacle. (1-2)

つまり、南北戦争で敗戦が皮肉にも南部の「遺産」となり、それが文学の題材として極めて魅力的であり、北部にはない「大いなる利点」として優位に働いたということである。確かに文学の題材としては、勝利したことより負けた方が悲壮感、屈辱、葛藤、苦悩などが生まれ、それらは悲劇の題材としては最適である。しかも、元々、南部には歴史的に、奴隷制がもたらす悲惨な状況や暴力的な出来事、階級や人種の軋轢、夢や野望など渦巻いていたが、それに「敗戦」がプラスされることで、スケール感のある悲劇を生み出す条件が揃ったことになる。William Faulkner の *Absalom, Absalom!* の中で、南部の話聞きながら、カナダ人 Shreve が吐く “Jesus, the South is fine, isn’t it.... It’s better than Ben Hur, isn’t it.” (217) という台詞は、まさにこのことを端的に言い表している。

南部農本主義者たちは、この「遺産」に目をつけ、それを文学の格好の材料として、北部との対抗軸を鮮明に打ち出し、「南部文学」というジャンルを打ち立てようとした。これによって「南部文学」は、単なる地域性よりも、南部の歴史的文化的要素に根ざした、極めて限定的な素材やテーマを扱う文学として一つのジャンルを確立し、アメリカ文学の中で存在意義を勝ち得ていった。

② “the only one South”という神話化

上述したように、農本主義者たちがあえて時代に逆らい「後ろ向きの視点」で、かなり限定的な存在を素材として構築しようとした「南部文学」が作り上げた「南部」は、極めて限定化、固定化されたイメージとして出来上がっていった。

この固定化をさらにモダニズムが後押しした。「後ろ向きの視点」は、敗戦によって伝統を否定され、過去の栄光や挫折に固執し抜け出せず、近代化の波にいやおうなくさらされ戸惑っている南部人を捉えるのに最適な観点であり、そのような「現在の中に過去を意識する」(conscious of the past in the present)南部人を描く際の文学手段としては、モダニズムの手法—意識の流れ、現在の過去の併置、流動的な時間、物語の分断と再配置—がうまく合致した。David Davis は近代化が進まない田舎の南部を近代的なモダニズムの手法で描く「南部モダニズム」を「皮肉」として以下のように説明する。

This discontinuity between modernist technique and rural content is the definitive characteristic of southern modernism. In the literature of the US South, ruralism is modernism. (464)

Davis は、内容と手法のくい違いこそ、過去に生きる南部人というテーマに相応しく、それにはモダニズムの断片による手法が最適であり、それを「田舎風モダニズム」(rural modernism)と呼んだ。

This method of discontinuous perspective proves to be ideally suited to representing the fragmentation of rural modernism. (470)

この「田舎風モダニズム」は、南部文学を単なる地方主義やローカル・カラリズムとは違った領域へ押し上げた。30年代後半には、John Ransom, Allen Tate, Robert Penn Warren らは農本主義から新批評(New Criticism)へ移行し、農本主義的なテーマをモダニズムの手法で描くことを推し進めていった。新批評は、文学作品に「有機的な統合」(organic unity)を求めるもので、この点で農本主義者たちの自然と人間が一体化した農本生活こそ文化を育むものという主張と重なる。

Edward Pickering は農本主義と新批評の親和性を以下のように説明している。

Having traced the affinities between Southern Agrarianism's "culture of the soil" and the New Critical notion of the poem as an organic whole, as well as the bond that unites the triad of poet, poetry, and society itself, there remains a specifically historical account of the organic metaphor at the heart of New Criticism. (99)

新批評は大学教育を中心に広がり批評界を席卷し、同時に、新批評が模範とする文学作品として、Faulkner をはじめとする南部文学を挙げ、その確立に貢献した。これによって、ますます「南部像」は固定化され、結果、排他的になっていったのである。Kreyling は、農本主義者たちの極めて恣意的な活動が南部像といふのイメージを規定し固定化させ、その強固な枠組みは、それ以外の南部が入り込む余地を失くしてしまったと鋭く批判している。

The Agrarian project was and must be seen as a willed campaign on the part of one elite to establish and control "The South" in a period of intense cultural maneuvering. The principal organizers of *I'll Take My Stand* knew full well there were other "Souths" than the one they touted; they deliberately presented a fabricated South as the one and only real thing. (xii)

結果、南部文学で描かれる南部は、現実の南部から離れ、神話化され^{iv}、揺るぎないメタファーとして維持され続けた^v。

⑤ ナショナル・ナラティブへの躍進

南部農法本主義者たちが提唱した新批評が、アメリカ全体で受容され、勢力を拡大できたのは、そのアカデミックで合理的な理論の説得性だけでなく、冷戦期という時代背景が大きな要因となっている。Jordan Dominy は *Southern Literature, Cold War Culture and the Making of Modern America* (2020)の中で、冷戦期のアメリカの知識人たちは「アメリカ的な民主主義」(American-style democracy)を文化を通して世界に示したいという強い衝動があったと以下のように説明している。

This cultural history through close reading of southern literature reveals the notions of the region and genre as a variety of Cold War nationalism deeply rooted in particular contexts related to American ambitions after World War II, which included the export of American-style democracy to the countries liberated from Nazi rule and from colonial rule. Along with this desire to spread American democracy comes the compulsion among intellectuals to cleanse communism, fascism, and other undesirable politics from all corners of cultural production. (xi-xii)

冷戦期のアメリカは、民主主義国家の長として、反全体主義陣営に対抗するために、自由主義を標榜した。このような「民主的」な態度は、自由と個人主義を後押しし、政治的に自由で中立的なものを求め、それを「アメリカの強み」として内外に示そうとした。このような非政治性を求めるアメリカの風潮が、新批評とモダニズムを結びつけた。どちらも文学作品の非政治性を重視しており、それが冷戦期の求める「民主主義」に受け入れられた。越智博美は、これを「冷戦期リベラリズム」と呼び、新批評はこのような冷戦期のロジックと共振し、南部文学をナショナル・ナラティブとして制度化していったと次のように説明している。

南部の反進歩主義の伝統主義者の担う新批評は、むしろ非政治的に文学を扱う姿勢を使って、進歩的であることを止めたアメリカの民主主義に、あるいは、反イデオロギーの冷静戦ロジックに、みずからをゆだねていきもした。新批評は第二次世界大戦から冷戦期にかけて、ナショナリズムのイデオロギー的な国家装置の文化的側面の一翼を担うことで制度化—アカデミー化—を果たしたのである。(93)

それを世界に見える形で示すことができるシンボルが必要であったが、モダニズム文学の理想型として新批評が白羽の矢を立てたのが、フォークナー文学である^{vi}。Lawrence Schwartzの説明の通り、このような冷戦期の新たに構築された「政治的」な環境が、フォークナー文学をノーベル賞まで押し上げた。

[A]s modernism--the postwar Zeitgeist--became the aesthetic expression of the restructured political environment, Faulkner's fiction was integrated into the culture of the new conservative liberalism of postwar America.... Faulkner became one of the beneficiaries of an aesthetic that was in complete accord with the new order. In short, the ideological shift prompted by the war converted Faulkner into the postwar moralist and symbol of solitary literary genius.... (28-29)

モダニズムや新批評の批評家たちには理想とされたフォークナー文学も、大衆には不評であったので、この冷戦期におけるイデオロギーの変換がフォークナー文学の再評価に繋がり、アメリカ文学を代表する作家としての地位を確立するに至ったことを考えると、その「政治的選択」はアメリカにとっては、予想以上の結果となって現れたことになる。

南部の田舎の文学がナショナル・ナラティブとして制度がされたことは、南部文学の素晴らしい躍進であるが、一方で、それはモダニズムや新批評が認めるもののしか受け入れず、南部文学を限定的に規定し、枠にはめてしまいそれ以外他のものを受け入れないという排他的な姿勢を生むことになったのも事実である。

III. 「南部文学」の展望：Forward

第2章と第3章で、南部文学を揺るがす、内的及び外的要因を検討してきた。南部文学が発生当時から時代の流れの中でその特徴を形づくり、確固とした地位を確立していたものが、今、新たな時代を迎え、揺らぎは始めている。今後、南部文学はどのような道を歩めばいいのだろうか。南部文学を新しい時代に相応しい方向にもっていくためには、どのような視点が必要なのだろうか。本論では、2、3章で議論した要因をもとに、3つのパラダイムシフトを提案したい。

① 脱神話化(de-mythicize)

南部といえば、その歴史から、奴隷制、人種差別、階級制、敗戦、南部再建などのテーマがすぐに思い出されるように、それらが南部のイメージとして固定化され、限定化されている。しかしながら、これだけが南部ではない。これらは作られた南部の神話であり、現実の南部像とは異なる。このようにあまりに過去の歴史に、やや偏向的に依存した神話から脱却し、実際の南部に目を向ける必要

がある。テーマや題材の拡大を図ることで、Kreyling が言うように、“the only one South”から脱して“Souths”(xii)が見えてくることを期待したい。

② グローバル化(globalize)

北部の産業主義の浸透や通信機器の発達などにより、北部と南部の文化的差異はどんどん薄くなってきている。南部はグローバル化されているという事実を認識する必要がある。全世界的にボーダーレスの状態が進み、南部に限った題材やテーマというのが見つけにくくなっているし、それに固執しては、南部文学の進展はない。南部を舞台にしながらも、南北のボーダーだけでなく、アメリカというボーダーも超え、グローバルで普遍的なテーマが求められる。

③ 多文化 (multi-culturalize)

南部の人種問題といえば、従来は白人と黒人という二つの人種の問題しかなかったが、第2章で見たように、今やヒスパニック系、アジア系の人口も増えていて、それらの間での軋轢が生じている。南部はすでに多文化社会になっている。同時に、Kreyling が提案しているように、黒人の男性作家や、白人の女性作家を南部作家として入れて、南部文学という幅を文化的にも広げる必要があると強調している^{vii}。

これらのパラダイムシフトを押し進めていくと、「南部らしさ」がなくなり、それはもはや「南部文学」ではなくのではないかという懸念があるが、むしろ、これまでの固定観念を捨て、現実の南部に目を向けることで再定義され、それによって新たな南部文学の広がり発展につながるはずである。

IV. 終わりに

Cleanth Brooks は「フォークナーは生まれた場所だけでなく、生まれた時代が幸運だった」(333)と言っているが、一理あるだろう。奴隷制、南北戦争など歴史に残るような劇的な出来事がなく、南北の違いも薄らいでいる現代において、「南部作家」は一体、何をテーマにし、何を訴え続けるのだろうか。本論では、南部文学の定義やそのアイデンティティが揺らぎ始めている要因を明確にし、それを土台にして、今後どのような方向に南部文学は向かうべきかを考察した。Faulkner に代表される南部文学のこれまで築いた伝統を全て捨てるのではなく、伝統を生かしながら、より広い視野で現実の南部を見ることで、現代という時代

に相応しいものに変容させ発展させる道を探るべきである。

しかしながら、そもそもこのような南部というジャンルにこだわるのは批評家だけかもしれない。作家は、自らが考える問題を、ただ作品として書いているのかもしれない。これまでの南部作家もそうだったのかも知れないが、批評家が枠に嵌め込んでしまったのかもしれない。とりわけ、アメリカに住む批評家たちは、それほど簡単に南部文学の枠組みを外すことは簡単ではなく、やはり南北の違いを意識せざるを得ないのかもしれない。そう考えると、南部から遠く離れた日本で南部文学を問うという作業は、むしろ客観的に違った見方が提案できる可能性がある。これも南部文学のグローバル化につながることは間違いない。

注

ⁱ Matthew Guinn も *After Southern Modernism*(2000)において、同様に、南部の新しい作家たちは南部の過去に対して「無関心か敵愾心」(ix)をもってこれまでの伝統的な南部文学に対処しようとしていると述べている。

ⁱⁱ “Preface: Violence, the Body and “The South”において、²““The South’ is thick with civilly disappeared history, the history of indigenous, black, Latino, and Asian laborers and their families, their joys and suffering largely effaced in this history of the Civil, under the mark of ‘The South’”(236)と、“The South”という言葉が、白人の歴史以外の歴史を抹殺してきたと指摘している。

ⁱⁱⁱ Raymond Mohl は、南部におけるヒスパニック系の人口増は劇的である(dramatic)と指摘している。1990 年から 2000 年の増加は以下の通りである。ノース・キャロライナ 394%、アーカンソー337%、ジョージア 300%、テネシー278%、サウス・キャロライナ 212%、アラバマ 208%である(37)。

^{iv} Romine は “the preferred mode of representation for the Agrarian was myth...” (“Where is Southern Literature?” 11)と述べている。さらに彼は“The South still operates as a battle slogan”(The Real South 9)と述べているように、これも重要な南部を売り出すための「戦いのスローガン」として機能したと見ている。

^v Rubin は 1962 年版の *I’ll Take My Stand* の序文で “as poets they were given to the metaphor, and they instinctively resorted to an image for their critique of American society”(vii)と述べている。

^{vi} Dominy は“Creation of a specifically southern literary canon, by the nationalistic project of the Cold War” (vi)と、冷戦期の国家的プロジェクトが南部モダニズムをアメリカ文学のキャンオンを作り上げたと述べている。

^{vii} Kreyling は、黒人男性作家としては、Ralph Ellison, Richard Wright, Ernest Gaines, Raymond Andrew、白人女性作家としては、Lee Smith, Josephine Humphrey, Jill McCorkle, Dorothy Allison を挙げている(viv-vx)。Kreyling はこれらの提案に加えて、フォークナーという「偉大なる前例」をいかに乗り越えるかも重要な課題としている。筆者は、これも脱

神話化の一つではないかと見ている。

参考文献

- Baker, Houston A., Jr., and Dana D. Nelson. "Preface: Violence, the Body and 'The South'." *American Literature*, vol. 73, no. 2, June 2001, pp. 231-43.
- Bone, Martyn. *The Postsouthern Sense of Place in Contemporary Fiction*. Louisiana State UP, 2005.
- Brooks, Cleanth. "William Faulkner." *History of Southern Literature*, edited by Louis D. Rubin, Louisiana State UP, 1985, pp. 333-42.
- Davis, David. "The Irony of Southern Modernism." *Journal of American Studies*, vol. 49, 2015, pp. 457-74.
- Dominy, Jordan. *Southern Literature, Cold War Culture, and the Making of Modern America*. UP of Mississippi, 2020.
- Faulkner, William. ~~William~~ *Absalom, Absalom!* 1936. Random House, 1964.
- Guinn, Matthew. *After Southern Modernism: Fiction of the Contemporary South*. UP of Mississippi, 2000.
- Hobson, Fred. *The Southern Writer in the Postmodern World*. U of Georgia P, 1991.
- Kreyling, Michael. *Inventing Southern Literature*. UP of Mississippi, 1998.
- McWhirter, David. "Towards a New Southern Studies." *South Central Review*, vol. 22, no. 1, 2005, pp. 1-3.
- Mohl, Raymond. "Globalization, Latinization, and Nuevo New South." *Journal of American Ethnic History*, vol. 22, no. 4, 2003, pp. 31-66.
- Pickering, Edward. "The Roots of New Criticism." *Southern Literary Journal*, vol. 41, no. 1, 2008, pp. 93-108.
- Romine, Scott. *The Real South: Southern Narrative in the Age of Cultural Reproduction*. Louisiana State UP, 2008.
- . "Where is Southern Literature?: The Practice of Place in a Postsouthern Age," *Critical Survey*, vol. 12, no. 1, 2000, pp. 5-27.
- Rubin, Louis D. "Introduction to the Torchbook Edition." *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*, by Twelve Southerners, Harper & Row, 1962, pp. vi-xviii.
- Schwartz, Lawrence. *Creating Faulkner's Reputation: The Politics of Modern Literary Criticism*. U of Tennessee P, 1988.
- Simpson, Lewis, Jr. *The Brazen Face of History*. Louisiana State UP, 1980.
- Twelve Southerners. *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. 1930. Harper & Row, 2006.

Wilson, Charles Reagan. "Considering the Past and Future South." *Southern Cultures*, vol. 25, no.1, 2019, pp. 6-11.

Young, Daniel. *The Past in the Present*. Louisiana State UP, 1981.

越智博美『モダニズムの南部的瞬間—アメリカ南部詩人と冷戦—』 研究社. 2012.